

バルザック評伝

第一部

若き日のバルザック (4)

金子 守

- 第一章 バルザックの少年時代
—— (本論集, 第11巻第3号)
- 第二章 屋根裏部屋のバルザック
—— (本論集, 第13巻第3号)
- 第三章 バルザックとベルニー夫人
—— (本論集, 第14巻第2号)
- 第四章 机上の実業家バルザック
—— (本号に掲載)
- 第五章 バルザックと『ふくろう党』
- 第六章 バルザックと七月革命
- 第七章 バルザックとカストリー公爵夫人
- 第八章 バルザックとハンスカ伯爵夫人

第四章 机上の実業家バルザック

バルザックがハンスカ夫人宛の手紙で告白した言い分によれば、われわれが耳を貸すなら、1823年にバルザックの母が年老いた実母、従って、バルザックの祖母サランビエ夫人をいびり死なせた翌年の春、一家はパリからヴィルパリジに再び戻るようになった。彼の両親は今度はこの村に永住する決心をしたとみえて近くのブリーに農場を手に入れる算段をした後、彼等がかつて住んでいた家屋を親類から買いとったのである。もっとも、バルザックの父ベルナール・フランソワがこの村でおこしたスキャンダルが原因で僅か数年でパリに戻らざるをえなくなるのだが。

作家バルザックは、われわれ読者がよく知っている『セザール・ピロトー』のなかで、セザール夫妻に田舎で余生を楽しく暮らす夢を幾度も語らせているが、この時期の両親の心情を推測しながらこうした場面の描写に専念したのであるらうか。

ともあれ、家族ぐるみ田舎へ帰る話がでた際、バルザックだけはヴィルパリジに戻る意志はなかった。パリから離れて田舎に住むことになれば、毎日、町で享受しているカフェ、劇場、新聞社などの編集室といった文芸的な雰囲気をあきらめることになるからであった。それになんとか、小説を執筆して飯を食べてゆける自信もつきかけていた。それで、バルザックは彼の父が上京した際に使用する目的でとっておいたベリー街にあるアパルトマンに当座は住むことにした。もっとも親父は息子にただで使用させたのではない。年に幾らで貸すことにし、契約書まで作製したのである。まさに『幻滅』の印刷屋親子である。そのためか、ほかの理由、たとえばベルニー夫人との逢引に便利なところというので、息子の方はほどなくツールノン街に逃げてしまう。

バルザックの父は、息子オノレのやることはなにもかも反対する母とは異なり、自分も作家の端くれであることを自認していたせいから、小説家になるから

には一人前になれ、有名になれとオノレを励ましたという。事実、われわれは彼が親父らしい心情をみせている証拠を甥などに宛てた幾通かの書簡に読むことができるのである。以下に3通のものを、アンドレ・ビリーが『バルザック伝』で引用した順にわれわれも読みたいと思う。

最初の手紙は、1822年にバルザックの従兄宛に投函されたものであるが、それには次の如く読める。

（私の長男は約1か月前から文学でもっとも偉大な創作方法を示しております。彼は1万フラン以上にもなるさまざまな作品を印刷させて売りました。それで、彼の健康がその創作方法にこたえるなら、誰よりも彼は話題になるでしょう。）（K）

そして、1823年には、上記の手紙同様、息子オノレの才能を高く評価した手紙を書く、すなわち、

（私の長男はあけてもくれても文学に熱中しております。フランスは彼の豊かな想像力が生んだ3つか4つの作品を読むのです……オノレは幾つかの作品に没頭しております。）（K）

第3の手紙は、1824年に書かれたものであるが、

（オノレは世間から身を隠して、人にわずらわされることのないように6階に住み、ひっそりと落ちついて仕事をしています……彼は文学に相変らず没頭しております。）（K）

と読める。

1824年6月、バルザックの両親はパリをあとにヴィルパリジに戻っていったが、バルザックは今度も小説家として成功するためには、パリに留まることこそ最短の道であると母に言い張ったであろう。バルザックの母はこうした息子を眺めて、オノレがツールノン街のアパルトマンに移ったのを知ったとき、普通の母親が子供を心配するのは異なり、疑惑をいだいた。そうした疑惑があたっていたと娘ロールに告げている手紙があるが、その文面によると、親の監視から解放されたオノレにベルニー夫人が誰に遠慮することなく逢いに来るの

だろうと推測しているし、それに息子オノレが夫人の入れ知恵でツールノン街に移ったにちがいないと思うと、ひとつ自分の目で確かめたいという妙な好奇心をいだいたらしい。そこで、彼女はバルザックに近日中に会いにゆくからと伝言して上京してみると、肝心の息子は逸早く雲隠れして、彼女がパリに滞在しているあいだ、遂に一度も母の前に現われなかった。逃げまわる息子の態度をみてとった母は、

「きっと、ここに夫人を迎えるためだわ。」

と周囲のひとびとにあたり散らしたというのが、やがて、彼女の推測通り、ベルニー夫人がその部屋に姿を見せた。

実は、この年、ベルニー家のひとびとはヴィルパリジの邸を売り払い、パリに移住することにしたのであるが、彼等が落ち着いた先のごく近くにというよりは目と鼻の先にバルザックのアパルトマンはあったのである。それゆえ、いつでもふたりは逢える状態にあった。しかしながら、もうこの時期には、バルザックはベルニー夫人と生活を共にすることが、彼のすべてとは思われなくなっていた。

一方、夫人とて心から愛しているバルザックが自己の掌中からすでに抜け出てしまっていることは悟っていたであろう。夫人の目には彼が彼女とふたりきりになっても、かつての逢引のように欣喜雀躍といった顔を滅多に見せなくなっているのに気づいていた。その都度夫人は予感していたこととはいえ一抹の淋しさにおそわれるのだった。というのも、事実、バルザックは作家や芸術家や新聞記者などと頻繁に交際するようになっていた。このように彼が精神的に自立の願望を示すことは、ある意味ではベルニー夫人も喜ぶべき愛人の姿であったかも知れないのである。それはバルザックが一人前の男として、社会人として成長する有様を眺めることになるからである。

だいたい両人のなれそめも、バルザックがおく手であったことが主な理由になっていると考えられるのである。すでに、われわれは第一章でバルザックの少年時代を眺めてきたが、母親の愛に飢えた少年というのは本当はおく手とな

るのだろうか。たとえば、われわれはスタンダールのジュリアンに母親を感じない。そんなジュリアンをレナール夫人はいとおしく思い、そこから夫人の愛は始まる。そして、ジュリアンの世間知らずがなおるとき、彼は他の原因もあるにせよ社会に巣立つのである。レナール夫人もそんなジュリアンが社会に羽撃くの座して見送ることしかできなかったのである。バルザックの世間知らずがベルニー夫人の愛でなおるとき、彼も巣立つ。バルザックの母に、息子さんを一人前にしてみせますわと誓ったのは夫人自身ではなかったのか。それでもときにはふたりだけでストーヴをかこむとき、50歳になろうとしていた夫人ではあっても顔がはてり、心臓の高鳴りを覚えるのだった。それはストーヴの熱によるものとは言えないものだった。いまではバルザックにもそんな夫人の気持ちが手にとるように分かるようになっていた。そうした夜、ふたりは彼等の夏の初夜の再現を演じたことだろう。

また、この時期、バルザックは過労が原因でか、持病を再発させ、自己の日常生活をゆっくりと時間をかけて反省したようである。われわれが眺めてきたように、彼の生活は小説を執筆し、原稿を出版社に持ちこみ、それを売って僅かの金銭を手にするのだが、これでは散々苦勞して数冊ものにしていても、自分が手にする金額はしれている。望んでいるような贅沢な生活は当分できこないし、それに時間をかけた仕事のわりには報酬が充分ではない。どうしたら夢が実現できるのかと考える。お金を手っ取り早く儲ける一番の近道、容易な方法、それはなんと言っても商売するに限ると、これがあれこれ思案した挙句のバルザックの結論だった。そして、彼は出版業に手を出すことになるのだが。もっともバルザックに出版業をすすめたのはベルニー夫人と彼の妹ロールであるとする説もある。ふたりとも、バルザックが三文小説を書き、彼の貴重な才能をいたずらにすりへらすよりは、一時、執筆を中断して、本当にお金が儲かるならたくさんのお金をため、それで完全に暮らしの心配がなくなれば、そのときこそ、彼は真の傑作をものにできるにちがいないと信じたからである。

丁度、バルザックが金儲けを考えていた時分に、出版社ユルバン・カネルで、医者のカロン・ド・パリとか、退役軍人のベネ・ド・モンカルヴィルと偶然知りあったのであるが兩人ともバルザックと同じくひと儲けしようと出版業に触手をうごかしていた。かといって、バルザックには出資するお金は一文もなかったのである。ところが、世間には物好きがいるというべきか、それとも、御節介がいるというべきか、数年前からダソンヴィレ・ド・ルージュモンがバルザック家の知人となっていたが、その彼が、バルザックたちの出版事業に興味をいだき、彼に6000フランの現金を融通してくれたばかりか、ヴィルパリジにいるバルザックの両親にも出版業は将来性があるから息子さんの事業を認めてやるようにと説得してくれたのである。

それで、家族の皆もオノレが事業家に転進する話は賛成だったらしいが、計画がどうにか軌道にのった頃になって、ただひとりだけ身内で反対する者がいた。そのひとりとは彼の2番目の妹ローランスで、彼女の兄バルザックに対する心からの忠告はこれ限りのものになろうとしていた。なぜなら、数か月後にはふたりの最愛の子供を残してあの世に旅立つからである。

（親愛なるオノレ、あなたが計画なさっている3つか4つかの商売のことが、わたしの頭のなかを絶えず往復しておりますわ。作家というものは、自己の女神を持っているものではありません。あなたがそうしてみえる如く文学に打ちこむとき、この職業は、有名な作家たちの全存在を占めたはずのこの職業は、新しい職業に従事する時間を、それもあなたがまったく知らない取引に身を投じる時間をどうしてあなたに残すことができますでしょうか、それに商売というものは、青春の初期からすでにそれに打ちこんでいることを反対に要求するものではありません？ あなたは世間のものごとを一番安易な手段であなたに眺めさせるひとびとと一緒にみえるのです。あなたの想像はどんどん先へ進み、3万リーヴルの年金を得ている身の上を夢みるのです。そして、才智が活動を開始し、たくさんの計画を作るとき、判断や理性は追い払われてしまうのですね。あなたは善良で正直なひとだから、他人もあなたと同じように、素直で誠

実だと思っていらっしゃるから、他人の性悪に対してまったく用心なさないことでしょう。親愛なるオノレ、わたしはあなたに好意をいただいているから、こうした考察をするのですわ。それで、わたしは財産にめぐまれ、立派な事業家になっているあなたを眺めるよりも芸術家に相応しい部屋である6階に住み、たくさんの原稿用紙や執筆中の誠実な作品に埋まり、ポケットに一文も持っていないあなたを眺める方がずっと好きですの。）(K)

丁度、スタンダールと彼の2番目の妹ゼナイードの兄弟関係がそうであった如く、妹ロールほど兄オノレと親しくなかったローランスはそれだけに第三者的な観察眼で兄オノレの性格を見抜いていたといえるのかも知れない。

なぜなら、スタンダールは下の妹ポリヌをたいへん可愛がり、彼の手紙もこのポリヌ宛のものは今日でもたくさん残っている。スタンダールはバルザックと異なり、7歳のときに実母を亡くしているが、母の死後、その妹セラフィーが事実上、子供たちの継母となり、まだ、赤児であったゼナイードはすっかり継母になつたが、スタンダールはこの継母セラフィーをなぜか徹底的に嫌っていた。そうした事情からか、彼はポリヌにのみ兄としての愛情をいだいたものらしい。

それゆえ、バルザックにとっては彼が喉の乾きを覚えるとき、差し出される水はロールのはいつも甘い水であり、母親のはいつもとびきり苦い水であったが、ローランスのものあたりが澄んだ無臭の水であったであろう。だが、バルザックは甘い水のみ欲しがるので、彼は他人に対してあまりにも正直で、取引に際して巧妙な、まして横着な駆引きのできる性格ではなかったのだ、ほどなく神に召される哀れなローランスの予言通り、事業に失敗して借金だけが残ることであろう。それも平均すれば1年に1万フランの割でたまってゆく借金を。

さて、出版事業はたんまり儲かるという話を素人の3人に吹きこんだのは、唯一のこの道のプロであったユルバン・カネルであると推測されている。彼等が刊行する第1号として選択した作品は、ラ・フォンテーヌの『寓話』であっ

たけれども、この4人が事業を仲間として協力しあったのは、出版の対象を決定した時点までといってよかった。バルザックを別とすれば、あとの3人は人生体験も深く、現実的な打算家だったから、うっかり儲け話にのりはしたものの、自分たちの投資にみあう利益がないことを見抜くと、5月1日には正式に事業から手を引いてしまった。それゆえ、最後に残ったのは、印刷している紙が御札に見えているバルザックだけとなった。もっとも、彼だけは仕事の分担をもめごとの最中も馬鹿正直に実行していたと伝えられ、4月17日には、ラ・フォンテーヌの挿絵の件で、アランソンとかゴダールといった版画家と契約したりしていたのである。だからバルザックは仲間たちが儲かるはずの出版業に見切りをつけて、上手におりてしまった事情をうかつにも見抜けなかったらしい。

こうして、バルザックは初志に反して独力で事業を継続しなければならなくなり、印刷中のラ・フォンテーヌを製本するためにはまだ約9000フランの経費がかかると見積られてしまう。それに紙代とても馬鹿にできない額となることをやっと知ったのである。さらに始末の悪いことには、若造である彼はその道の商人たちから素人であるために見縊られ、さんざんまきあげられるのだが、バルザックは商人の手口を露ほども疑うことはなかったのである。まさに妹ローランスの忠告と心配は現実のものとなった。

それでも、鏝一文なかったはずの彼が不思議なことに決済しているが、その謎を解く鍵は当時の帳簿に秘められていた。つまり、それによるとバルザックは3通の手形で決済し、破産をどうにか免れているが、実は3通ともベルニー夫人宛に振りだされた手形であった。こうして、本はやっと完成したが、買い手は殆ど現われなかった。そこで仕方なく、バルザックはラ・フォンテーヌ本を全部まとめて、ヴォジラール街にあったボードワン書房に捨値で投売りしている。

バルザックはラ・フォンテーヌ本の失敗だけで懲りればよいのに、身銭を切ることのない暢気さからか、それとも一見夢想家にみえても、ベルニー家の金

庫をあてにしてか、ラ・フォンテーヌが駄目ならモリエールでと考えた、案外、モリエールがあたるかも知れない。そうなれば、ラ・フォンテーヌの失敗もすぐ挽回できようと、取らぬ狸の皮算用にふける楽家ぶりを示している。彼は屋根裏部屋で一文すら惜しまなければならぬ窮屈な生活とはなんとしても縁を切りたい境地になっていたのである。そして、ときどき、彼はつぶやく。

「それにしても亡くなったローランスもひどいことを言ったものだ。鰐銭を数えている私の方が好きだなんて、冗談じゃない、あんな貧乏暮らしは真っ平だ。」

とにかく、バルザックは喉から手を出してでも、まとまった大金を掴みかかったのである。それでモリエール本1冊の値段を20フランで販売することにしたが、彼があっという間に全部捌けると目論んだモリエール本1000冊は本屋の誰ひとり見向きもしなかった。100冊どころか数えるほどしか売れなかったという。大多数は読書家の手に渡ることなく、倉庫にねむる紙屑の山となりかねなくなり、さすがにバルザックも愕然としたとみえて、値段をあわてて12フランにまで値下げをしてみたが、注文主は一向現われなかった。結局、モリエール本もどうにか売れた部数は、スタンダールの『恋愛論』を出版した本屋がこれは神聖な書物ですと嘆いた部数と同じ20部のみであったという。これではまた二束三文で売り払わざるをえなくなった。清算してみると、利益として勘定していたと同額の1万5000フランの赤字を頂戴する結果となっていた。

こうした失敗を2度も体験すれば、普通の神経の持主なら、うまい話があったとしても金輪際手を出すまいと心に誓うはずの痛手だったが、バルザック当人はいっこう萎れる様子はなく、今度は印刷屋になろうと計画していた。それに、この仕事は一石二鳥というもんだと彼は考えて嬉しくなるのだった。今まで執筆した小説やこれから執筆する小説を自分が印刷して売れば丸儲けとなる。今度は成功まちがいない。

バルザックは1826年4月12日に内務大臣に印刷業の許可を求める書類を提出している。彼の父は息子オノレがぱっとしない小説家になるよりはまじだと判

断したのか息子のために年金としてとっておいた資金をつぎ込む決心をしたという。そこで、バルザックは3万フランでマレー・サン・ジェルマンにあったローランス印刷所を諸設備ともに買いとる計画をしていたから、父が融通してくれた資金などで、この印刷所をとにかく手に入れたが、王政復古下の時代には、印刷業を営む場合は政府の御墨付が必要であった。それで上記の如く当局に営業許可を出願したわけだが、実はこの件についても、ベルニー夫人の助力が認められる。というのは、バルザックの人物を当局に対して保証したのは、夫人の夫であるガブリエル氏であり、彼はバルザックを当局に次の如く推薦している。

(小生はこの青年を昔から知っている者であり、彼の誠実さと文学におけるその知識から判断して、小生は彼がこの職業が課している義務を多分納得しているものと確信する者であります。)(K)

この推薦状がものをいったのか、1826年6月1日に、ローランス印刷所の免状は、正式にバルザックに譲渡された。彼は6月4日に公式に開業届を当局に提出しているが、今度の事業で、バルザックが協力者として目をつけたのは、アンドレ・バルビエという植字工で、多分、バルザックはボードワンの所で、バルビエと面識を持ったのであろう。従って、彼はその道の専門家を仲間とすることに成功したことになるが、その引抜きには金がかかった。バルビエは前の勤務先を辞職する条件として、バルザックから保証金として1万2000フランをすっかりせしめていた。ようやく、7月1日にバルザック・バルビエ商會が設立された。もっとも両人の印刷業がすぐ軌道にのり、彼等の工場に新しいインクの匂いが広まったわけではなく、約1か年後の1827年9月19日になって、操業に必要な活字とか、その母型とか、鋳型とかをやっと揃えることができた。というのは、バルザックが明日にも操業できると安易に考えたローランス印刷所には旧式のものか、殆ど使いものにならない設備しかなかったからであるが、悲しいことに彼には印刷知識がまったくなかったので、売主のずるさを見抜けなかったのである。もっとも、このときしてやられたにがい体験が

『幻滅』のなかで生かされていることはわれわれも周知のことである。

さて、両人は商会の営業にあたって、業務上の分担をきめ、工場関係は経験豊かなバルビエの仕事とし、取引の仕事はバルザックが担当することにした。両人はさらに事業を拡張する計画をたてたが、実際はバルザックのひとり相撲ではなかったのかとわれわれには思えるけれども、ともあれ、両人はこの商会を12年間は盛大に繁昌させる意気ごみにかられ、大いに利潤をあげたい欲望から、活字鋳造所を併設し、次は版面製作にも手をのぼす計画をたて、ピエール・デュルーシャルからステロ版の製法を買いとることにした。

この件では、われわれにひとつのエピソードが伝えられている。それは先方へ交渉に行った際、バルザックがステロ版の製法の珍らしさに肝心の取引も忘れて、恰も子供が玩具に見とれる如く、ひどく感心していつまでも眺めこんでいたというのである。

アンドレ・ビリーはバルザックのこうしたエピソードを描写して、彼を大人子供と呼び、それはバルザックの全生涯に眺められる彼の性格の特色であるとみなしている。

ところで、バルザック・バルビエ商会の事業はどれも思わしくなかったとされ、すでに破産を予想したのか、操業を始めて僅か数か月後には協力者のバルビエは手を引いてしまったという。それでもバルザックがその工場で印刷した本のリストをジョルジュ・ヴィケールが当時の『図書新聞』から作製しているが、それによると、ジャリ夫人、ヴィルマン、メリメ、ラトウーシュ、ヴィニーなどの名がわれわれに読める。勿論、バルザック自身も『パリ情報小辞典』とか、『借金支払の技術』などを執筆し出版している。

上記の筆者たちのなかで、われわれはラトウーシュの名を記憶しておかねばならない。というのも、彼とバルザックとの関係は後者の『ヴァン・クロール』の出版を契機にこれ以後5、6年のあいだかなり密接に続くからである。

その信憑性となると疑わしいが、ヴィニーとバルザックのふたりがわれわれに寸劇を残している。このエピソードは以下の如く演じられた。ヴィニーはバ

ルザックの印刷所で『サン・マール』の第2版を印刷する契約をしていた。

ある日、ヴィニーが印刷所を訪れた。

その日は、バルザックは薬屋のガマの油の口上じみた宣伝文を印刷したあとで虫の居所がわかった。彼の目にはヴィニーがたいへん尊大な人物に映っていた。そのヴィニーが退出するときに独り言を口にした。

「なんて汚ない男だ！ ……それにあのおしゃべり、……口角に泡をたてながらしゃべる。」

それを耳にしたバルザックはヴィニーにがまんならなくなり、植字場へやってくる

「こんな駄作は早く仕上げ、他の印刷に移ろう！」

とまくしたてたという。

ともあれ、バルザックがヴィニーの『サン・マール』を印刷したのは1827年のことであるが、その折、彼は浪漫派の作家たちと知りあう機会にめぐまれた。というのは、ユルバン・カネルが〈1827年から28年のランネ・ロマンチック〉というタイトルで叢書を刊行しようとしていたからで、その企画を助けるために、バルザックは多くの作家たちと交渉する役目を引き受けたからである。これらの作家には、ヴィクトル・ユゴー、ガスパール・ド・ポンス、アドルフ・サン・ヴァルリーやアンリ・ド・ラトウシュなどがいた。

バルザックは彼なりに経営に努力したのだが、それでもやはり素人の悲しさで次第に営業資金にこと欠くようになっていた。ベルニー夫人はバルザックの今度の事業にも間接的に援助していたと推測されるが、商会の破産を避ける再建話がでたとき、直接投資する決心をしている。すなわち、新商会は夫人とバルザックと管財人であるローラン氏の3人がそれぞれ資金を出しあって経営することになったが、具体的には、3万6000フランの資本金のうち、バルザックが9000フラン、ベルニー夫人が彼と同額の9000フラン、残額の1万8000フランがローラン氏の投資額であった。

今度も、また、バルザックの父は再建話を知った際、相変らず楽天主ぶりを

發揮している。息子オノレが病気になるようなことなく15か月もすれば、きっと事業の基礎をかため5、6年でひと財産作るだろうと例の如く甥に話していた。しかし、彼の期待も空しく新会社も1828年4月16日には破局を迎えてしまった。さすがのバルザックも事業がことごとく失敗した事実を家の者に報告せざるをえなくなり、その顛末をやむなく母親に打ちあけるが、82歳になっている父親には正直に告げる勇気はなかった。そんなことをすれば、息子の成功を信じている彼に致命的なショックを与え、あれだけこの世に生きたいものと願っている、その彼の命を縮めかねないと思うと、相変らず恐ろしい母親に白状するより仕方なかったのであろう。

バルザックの母はすべてを知らされて腰もぬけるほど驚愕した。それでも彼女は自分がじたばたしては夫に露見すると判断したのか、信頼できる親類のキャラコ商人シャルル・セディオに手紙を出して、息子オノレの事業を清算してほしい。すべての権限を委ねるから、夫には悟られないようにと依頼した。そこで、セディオはこの一文の儲けにもならない辛い仕事を忍耐強く果していった。彼は債権者たちと根気よく談判し、先ず印刷所を6万7000フランでバルビエに免状とともに譲渡した。その結果、負債残額が約10万フランになることが判明した。その約半額がベルニー夫人の投資した合計金額にあたり、夫人は抵当として活字鑄造所を手に入れ、息子のアレクサンドル・ド・ベルニーに経営を続けさせることにした。

こうして印刷所も活字鑄造所もバルザックの手からはなれたわけであるが、皮肉なことに彼が関係しなくなった途端、両事業所は揃って好転したと言われている。一方、バルザックはベルニー夫人から借用した残額を夫人の息子アレクサンドルに返済する約束になったため、この若い債権者に厳しく取りたてられることになった。バルザックはこの取りたての執拗さに参ったとみえて、夫人を名ざして恨みはしなかったものの、1836年6月にハンスカ夫人に宛てた手紙を読んでもみると、夫人の件ではたいへん悲しく思っており、直接には彼女のせいではなく、その家族の仕打ちからだと言ふ、それにそうした仕打ちの内容

は書かれるべき性質のものではないとまで、ハンスカ夫人に告白している。さすがのバルザックもよほど骨身にこたえたのであろう。

アンドレ・ビリーは以上の如きバルザックの事業の破局をわれわれに語った際、次の如きエピソードを紹介している。

（マレー街にあるアレクサンドル・ド・ベルニーの事務所にあるストーヴの上に花の女神であるフローラの胸像があった。

—ある日、この胸像が幾らか分かるかいと、ベルニー夫人の息子は友だちのひとりの青年に尋ねていた。1万5000フランもしたのだよ。……あの頃、バルザックが私にたくさんの借金をしていたのさ。それで、彼は私にこう言った。

—私はあなたに現金で払うことができないからね。ここにあるもので欲しいものを持っていってくれ。

それで、アレクサンドルはこの胸像をバルザックから召しあげたのであるが、確かに1万5000フランに価する代物ではなかった。) (K)

その頃、バルザックは贅沢な生活態度を母から厳しく叱られて、あれこれ弁解につとめている。彼の母は息子が破産したのにもかかわらず悠然と贅沢な生活を送っている様子を知ると、どうにも承服しかねたらしい。そこで、バルザックはうるさい母に贅沢な品物は破産する前からあったものですが、現在ではもう余分の贅沢品は置いてありません。調和を保つための趣味に相応しい品物が残っているだけですと答えている。

また、この頃、一時ではあったが、バルザックは債務者につきまといわれるのを避けるために真意の分からない好意をみせてくれたアンリ・ド・ラトウシュの住居に身を隠したことがある。バルザックは実のところ数か月前から彼と親しく交際を始めたにすぎなかったけれども、両人が親密となった動機はすでにわれわれが先述した如く、バルザックが執筆した『ヴァン・クロール』を出版する際、ユルヴァン・カネルが彼を説きふせて、ラトウシュの作品ということで出版したいと主張したことからである。

アンリ・ド・ラトウシュは小利口な目先のきく人物で女性的な性格の持主であったと伝えられているが、パリの文壇では当時かなり知られていたらしい。しかし、彼は文学的な才能にかけてはたいしたことはなかったが、それでも、彼は特殊な才能の所有者で、まだ、世間に知られていない優れた才能を持っている不遇の作家を掘り出すことにかけては当代一流で、こうした嗅覚ばかりは彼の右に出る者がなかったという。

それで、ラトウシュは30歳近くにもなって、文壇に作家としていまだに迎えられていない、しかも、事業の破産者であるバルザックに会う毎に次の如く熱心に忠告したという。

「あなたは十分に才能があるのだから、文学に戻るべきだと思います。これは少ないけれど当座の小遣いです。どうぞ受けとって下さい。」

バルザックは彼の忠告や親切を当初こそ心から感謝している様子だったが、度々繰り返されると、同居している引け目も手伝ってか、ラトウシュがうるさく感じられるようになり、好都合なことにシュルヴィルが彼の名前の使用を許してくれたのを機会に、バルザックは義弟の名前で1828年3月にカシニ街にアパートマンを借りてそちらへ移った。そこで、彼は債務者からも保護者ぶるラトウシュからも邪魔されずに創作に没頭できるようになった。実はシュルヴィルはバルザックに名前を使用させたばかりでなく、アパートマンの1か年の借賃400フランの前払いをしてやったという。近くにはリュクサンブール宮殿があったが、当時はその先はもうパリではなかった。

バルザックは誰かが彼を訪ねる毎にこう語っていたという。

「印刷業は私のあり金すべてを巻きあげたのだから、今度は私に返してくれる番だ。」

実際、バルザック本人にとってみても、破産者である自分を気軽に迎えてくれる世界はもう文学界以外にないことくらいは充分に分かっていたであろう。こうした認識から、彼は10年前にレディギエール街の屋根裏で『クロンウェル』を執筆していた時期がまさにそうであった如く、人生での文学との再度の

真剣勝負を挑まなければならぬ時期にあると覚悟したことであろう。

さて、多くのバルザック研究者たちは、バルザックが様々の事業に失敗したとはいえ、現実の社会体験を深めたことで、彼の文学が現実味と深まりを獲得して、成功への飛込台となったと示唆してはばからない。なるほど、バルザック文学の特質のひとつである金銭の世界はそうした作家個人の体験が創作の土台を形成している事実をわれわれは頭から否定するものではない。しかしながら、一方では彼にそうした個人体験がなかったとしても、バルザックはやはりフランス文学史に名をとどめる作家と成り得たであろうとわれわれは考えるものである。バルザックの2番目の妹ローランスが予感したのはこの点にあったのだが。というのもモーリス・バルデッシュの研究をわれわれが丹念に読むならば、そして、われわれが彼の研究を紹介してきた先をたどるなら、バルザックがウォルター・スコットの世界を完全にマスターしつつあることは自明のことである。そして、その成果は『ふくろう党』に結実しようとしていた。この小説を語る前に、われわれはもう少しバルザックのこの時期の生活を追ってみようと思う。

彼は厳しい叱責を母親からなり、世間からなり頂戴するとふたりの優しいロールに慰めを求めるパターンを繰り返していたが、この時期、妹ロールの方はベルサーユに移住していた。1825年にシュルヴィルが仕事の関係でこの地に赴任していたからである。バルザックはシュルヴィル家のサロンで心から信頼のできる3人目の女性の友を見出すことになる。もっとも、彼は妹ロールからその女性については、度々聞かされていたはずで、ズルマ・カローは寄宿学校時代からロールとは親友であった。

ズルマはイスーダンで1796年3月24日に生れているからバルザックより3つ年長であり、その容姿は現在残っている肖像から判断すると、細い顔立にみえ美人でもないが、背は小さい方で少しびっこだったと言われているが、性格は激しく素直な女性であったと伝えられている。彼女の父はイスーダンで助役まで勤めた官吏であるが、その家庭は思想的な面では、むしろバルザック家と

は反対に自由主義者的であり、明らかに共和主義を信奉していたとみられている。

1816年にジュールマ・カローは理工科学校出身のフランソワ・ミッシェル・カローと結婚しているが、両者の姓名からも分かるが、フランソワは彼女の従兄で新婚当時は砲兵大尉であった。けれども、彼は戦死よりもまじだったというべきだが、不運にもイタリアでの戦闘でイギリス軍の捕虜となり、8年間にわたって、かの地に抑留され、釈放されたのは1814年になってからであった。従って、そうした事情から同期の連中より出世が遅れ、立身出世の機会をむぎむぎ逸してしまい、彼の頭から後悔の念が生涯はなれなかったという。

一方、ジュールマはともすれば暗い気持ちになりがちな不運な夫を心からいたわり、つとめて明るい家庭の団欒を保つようにふるまっていたが、夫のフランソワがベルサーユに近いエコール・ド・サン・シール（陸軍士官学校）の教官に赴任したことから、ベルサーユに先に移住していたバルザックの妹ロールとの交際が復活したのであると推測され、それに、両人の夫たちが、偶然ではあったがともに理工科学校出身で先輩後輩のあいだがらでもあったので、家族の交際がいっそう親密になり、おたがいのサロンの客となりあったようである。

そこへバルザックが相変わらず陽気な顔みせる。パリでのきつい生活苦や事業の失敗からきているストレスをいっときでも忘れるために、彼はわが家同然ともいうべきシュルヴィル家に向いてくるのである。いつの日か、シュルヴィル夫妻はバルザックをカロー夫妻やカロー氏の友人でもあり、同僚でもあるペリオラス大尉にも紹介したことであろう。バルザックは大尉からナポレオンのモスクワ遠征の様子を熱心に尋ね聞き、戦争小説のための多くの資料を取材した。こうした縁で、バルザックはジュールマ・カローと生涯にわたる友情を結ぶことになるが、これが両人の関係の発端である。しかし、そこにはいわゆる男女の関係は認められないとされている。

そして、2, 3年が過ぎ去った1829年の春、仕事の多忙ゆえか、カロー一家の

サロンから遠ざかっていたとみえて、次の如き手紙を夫人宛に出しているが、兩人がどのような交際をしていたのかが読みとれる文面である。

《時々こんなことを仰しゃっていましたか——オノレさんは、私の手袋入にと約束してくれた長方形の版画を送って下さるのに随分ひまどるわねって。それから煖炉の衝立も、マッチ入れも、安請合するくせに約束を守らないんだわ、なんて。

こんな風に言われて鼻を高くしているわけじゃありません。でも小生のことを考えて下さる時には、小生の明らかな無頓着を許して下さいとあてにしています。貴女のことをいつも考えてもらいたいとお希みの時は、お気に入りの人達に買物を頼まれるとよろしい。しなくてはならないものを思い出すこと程、世の中に雄弁で抗し難いものはないと言えるでしょうから。

今朝、小生は煖炉の傍で手紙にせっせと封蠟していましたが、新しいマッチを取り上げる度毎に、小さいきれいな家具の周りに貴女が置いて下すった2匹の犬が、私にわんわん吠えついて来ました。これで100回目です。

オノレさんは好い加減な人でもありません。でも彼は1か月前から、自分の名を付けない作品を急いで仕上げなくてはならないのです。芸術家達はサインをしない絵を生活の為に描き、サロン（王立展覧会）に展示する絵は有名になる為に描きますが、私もそんな所です。

衝立は買って差し上げます。私はこの負債を大変喜んで引き受けましたので、それを履行するのも楽しいわけですから、その上、貴女がマッチ入れと衝立をフラペルの、きれいないろんな家具の間に置かれれば、小生には抵抗できない友情の源がそこにあることになりましょう。豊かな魂に追憶されるということが、小生の一番大切な幻想の一つなんですから。

小生の著書の著者本を手に入れる為只今係争中です。判定が下らなければ、送って差し上げられません。恥じずに白状すれば、それを買う程のお金がありませんから。）(T.S)

この手紙は1829年4月17日にパリで投函されたものであるが、文面の最後に

読める著書とは『ふくろう党』のほずである。明らかに手紙のなかほどに読める作品は、バルザック自身が画家の例をあげて説明している如く、別ものと思われる。われわれは今度は『ふくろう党』の誕生をみたいと思う。

バルザックにこの小説の主題を暗示させ、着想させたのはアンリ・ド・ラトウシュであると言われている。

ある日、ラトウシュはバルザックに会うと、疲労からようやく元気を取り戻した彼に向かってこう言った。

「歴史小説が流行している。君も執筆したらどうだ、君にはもののできる才能があるよ、きっとよく売れる。」

勿論、バルザックにも異論はなかったのだが、これまでの創作方法では駄目だ。足が地につくような感じが欲しい、それには文献がいる。幸いにも格好の種本が見つかった。バルザックによればまったく偶然だったというのであるが。それは革命政府時代のひとりの軍人が書いた『ヴァンデ党、及び、ふくろう党反乱討伐戦、及び、その間における救国委員会の記録、業誌にもとづき作成された西部諸県年代誌』という本であった。バルザックはこの本を主な資料にして、1828年の秋、後に『ふくろう党』と改題された小説を着想するにいたった。

さて、その具体的な作品像は、バルザックが数年前に興味深く読んだウォルター・スコットの『ケニルワースの城』とどこか類似していた。それにしても今度はバルザックはたいへん慎重だった。上記の他にもさまざまな資料を集め、時間をかけて作品の構想を練っている様子がみられた。彼はすでにこの小説に『ガー』という題名さえ付けていたものの、作品の舞台となるヴァンデの戦闘がどのような地形であったのか、現地に行ってみなければ、読者を納得させる描写は不可能だったし、またそうした地形を正確に記入することが、小説に真実性を与える創作技術であることを、バルザックはスコットの小説を読んでようやく開眼したらしかたなのである。

ヴァンデ地方での取材となると、バルザックには思いあたる人物がいた。そ

の人は父の友人であった故フランソワ・ド・ポムルール男爵である。実は1823年に男爵は他界してしまっていたが、子息のシルベール男爵は1824年に少将に昇進すると同時に軍職を辞して、郷里のフージェールで隠退生活を送っていた。このポムルール家はフージェールの由緒のある名門で、シルベール男爵の祖父は司法官であったし、その父は軍人であり、知事まで務めた人物であった。この人とバルザックの父とは1789年以前からの知人関係にあったらしいが、両者の交際が深まったのは明らかにツール時代と考えられる。この時期、すでにわれわれは先述したと思うが、バルザックの父は師団の糧秣部長職にあり、知事であったポムルール男爵に仕事の関係で頻繁に会う必要があったのであろう。

今回、バルザックが連絡する相手のシルベール男爵は、大革命時代には母親と共に牢獄に収容されていたが、ナポレオン時代には軍人として大いに活躍し、戦場にあっては手柄もたてたとされている。男爵が余生を送っているフージェールはヴァンデ地方の中心地であったから、取材相手としては彼以上の好都合な人物はいなかったと言えよう。

実は男爵邸は先代が1810年にかのシャトーブリアンの姉から入手したものであった。先代が存命中の頃は管理人まかせで手入れもされていなかったが、シルベール男爵は余生をこのマリニイで暮らす決心をし、邸を改築し移住したのである。それもバルザックが滞在する年の3、4年前のことであったから、彼はついていたと言えよう。それで、作家の彼が『ふくろう党』でラ・ヴィヴチエールという名前で描写しているものこそこのマリニイである。

シャトーブリアンもマリニイのことを『彼岸よりの追想記』のなかで次の如く描写しているという。

（私の姉が居たマリニイの別荘は、フージェールから3里離れたところにあつて、2つの沼地の間に位置し、森や岩や野原の間にあつた。私は静かな数か月をここで過ごしたが、パリからの手紙は私の休息を大変さまたげるのであつた……マリニイは、私の姉が暮っていた頃とはすっかり変わってしまった。姉は

この土地や別荘を売ってしまい、今ではポムルール男爵の手に管理されている。最近、男爵はこの別荘を手に入れ、美しくした。）(W)

数年後、バルザックはレカミエ夫人のサロンでシャトーブリアンに紹介されるが、そのとき、このマリニイのことがふたりの話題となったであろうか、バルザックもマリニイがかつてシャトーブリアンの姉の所有であったことくらいは知っていたであろうからである。

それで、バルザックは1828年9月1日付の書簡で、シルベール男爵に小説の創作のために現地調査を是非したいので、お宅に20日あまり逗留させて頂きたいと申し込んだのである。彼はこの書簡の冒頭で、事業に失敗した報告を男爵にしているのが先ず読まれるが、以下に引用する文面通り、それゆえ、並々ならぬ決意で文学に戻ると語っている。

（この悲しい出来事の前に、私の新たな決断から生まれました状況をお知らせします。私は再びペンをとることに致しました。私が生活して、母に借金を返す為には鳥か鷺鳥の敏捷な羽根が必要です。

1か月来、私は興味深い歴史ものにとりかかっております。私の全く疑わしい才能の代りに、我が国の風俗が私に幸運をもたらしてくれるものと期待しています。私の雑文を書いていたのでは、いくら精を出しても、来年1月迄は、公務員俸給に類する程の収入もなかろうと解りました所、全くの偶然で、ふくろう党及びヴァンデ党の戦いに関係のある1798年の一事実を聞き込みました。それは簡単に書き上げられる作品となるでしょう。地方事情以外は何の調査も要りません。

私が第一に思いついたのは貴方のことで、貴方に20日間程隠れ処を提供して下さるようお願いする決心をしました。楽神がコルネットを携え、手には原稿用紙を持って、私と二人ならばきっと邪魔ではないと。けれども実は二番目の考えは、疑いなく、お邪魔だろうということ。ですから、これ程率直に申し上げた間には同じ位率直な答が要ります。この点について軍人の誠実さをもってお答え下さるようお願いいたします。その場合には、貴方も私と同じように思われ

ると思いますが、私が貴方と同様丁重にお願い申し上げるつもりでおりますお母様は、小説家奴に、城館の一部屋を下さるであろうし、私は何方様の邪魔にもなっていないという自由な気持と大股の足取りでもって遠足ができるからです。そこで、お願いしたいのは、詰物なしのベットとマットレス一枚、四本足がそろっていてこわれていないテーブル一つ、椅子一つが屋根の下にあること、大変ありがたううれしい貴方の好意だけです。) (T.S)

ジルベール男爵はこんなあつかましいバルザックの手紙を受けとったのに、退屈な日々を送っていたらしく、喜んで彼を招待した。バルザックは現在もなお残っているポムルール邸の3階の部屋を使用させてもらっていた。その部屋の窓からは小説の第3部に描写することになる素晴らしい風景がいながらにして眺望できたのである。さらに居心地がよかったのは与えられた部屋ばかりでなく、ジルベール男爵夫妻はバルザックを心から歓待している。男爵はバルザックの要望に応じて自ら喜んで彼を古戦場に案内して、自分が知っている限りの知識を披瀝して彼の取材を助けたし、自分も参加していたナポレオン戦史を詳しく彼に語って聞かせもした。そして、おなかをすかして帰るバルザックには男爵夫人が真心こめて料理したたくさんのご馳走が彼を待っていた。

バルザックはこうした歓待にこたえるつもりか、饒舌ぶりをしきりに発揮して、執筆中の小説の構想を滔々と男爵夫妻に語り、この作品は『ガー』という題名を持つのですと告げ、出来あがっていた粗筋をふたりに語り聞かせもした。しかし、今日では『ふくろう党』という題名でフランス文学史に席を持つこの小説の原題を変更させたのはジルベール男爵夫人であったと伝えられている。夫人はバルザックにガーという発音には何か下品なひびきを感じられると指摘したという。バルザックはこうしたやりとりがあったから、うら若き男爵夫人の忠告を素直にききいれて『ガー』と決めていた題名をわれわれが今日使っている『最後のふくろう党、あるいは1800年のブルターニュ』と改題したのである。

バルザックがポムルール邸に滞在した年より56年後のこと、ある伝記作家が

バルザックの生涯を執筆しようとして、取材のためにまだ年老いて健在のジルベール男爵夫人を訪れたとき、夫人はバルザックが邸に初めてその姿を現わした際の印象を驚くほど詳しく語ったというのが、以下がその報告である。

（まるまるとふとった小男でした。着物の仕立てがわるいので、ただでさえ不恰好なのがいっそう不恰好に見えました。手はじつにきれいでした。ずいぶん粗末な帽子をかぶっていましたが、さてそれをぬいだとなると、ほかはみなどうでもよくなって、ただもうあの方のお顔にばかり見とれてしまいました。あなたはごらんにならなかったのですもの、あの額とあの目がどんなだったか、とてもお分かりになりませんわ。ひろい額にはランプの反射のようなかがやきがありましたし、一面に金砂子の散っている茶色の目は、口ほどにものいう目でした。角ばった大きな鼻、大きな口、その歯ならびのわるい口もとがいつもニコニコと笑っていました。こい口ひげをたくわえて、長くのばした髪の毛はうしろへかきあげてありました。その時分、それもわたくしどもへおつきになったばかりのときは、どちらかというやつれていて、なんだかひもじそうな様子でした。かわいそうにガツガツめしあがりましたよ。一口にさあ何と申しあげたらよろしいでしょう。身ぶりから話し方から立居ふるまいから何から何まで、ほんとにうちとけていて善良であどけなくてざっくばらんなので、存じあげれば存じあげるほど愛さずにはいられない人でした。それにひどく変っているというのは、いつ見ても上機嫌なことでした。しかもそれが吹きこぼれそうな勢いなので、はたのものまでつい感染して上機嫌になってしまうのです。いろんな辛い目にあっていながら、わたくしどもと顔を合わせてものの15分とたたず、まだ自分の部屋にも案内されていないうちから主人とわたくしを涙の出るほど笑わせてしまいました。）(M)

ポムルール邸で兄バルザックが世話になったことを知ったロールは男爵夫人に礼状を出したらしく、その後、約10年間にわたって両者のあいだに文通が続いた。夫人はマリニがたいへん気に入り、パリに住みたいとは思わなかったらしいが、それでも都でおこっているニュースを知りたがった。ロールはそう

した夫人の期待に答えて、パリのモードや社交界のニュースを書き送るのが常であった。ロールはときには夫人に世話になった兄やバルザック家の消息を語ったという。

1829年にバルザックはこの小説『ふくろう党』を出版することになるが、彼はそれまで筆名として使用していたオラス・ド・サントーバンと署名するのをやめて、この小説で初めてバルザックと実名で署名している。それにしても、この小説の献辞はさんざん世話になったシルベール男爵夫妻に捧げられたのではなく、約10年前、バルザックが屋根裏部屋で『クロンウェル』を執筆していた頃、なにかと世話になったテオドール・ダブランに捧げられている。すなわち、

（初めての友人に、初めての作品を云々）

と記されている。しかし、何が原因でかわれわれによく分からないのであるが、数年後、バルザックはダブランと喧嘩別れをしてしまっている。

勿論、バルザックは男爵夫妻の好意を生涯忘れはしなかったけれども、二度と直接彼等に会うことはなかった。ただ、2、3年後に彼ががらにもなく政治家になる野心をいだいた際、シルベール男爵と書簡のやりとりをしていたことは分かっている。そこで、後年になってバルザックは作家の特権を行使し、男爵夫妻に感謝の意を表明することにした。すなわち、1835年に『改悛のメルモット』を出版した際に、彼は献辞をシルベール男爵に捧げている。

（われらの父親たちを結びつけ、今もなおその息子たちのあいだにある変わりなき友情の思い出に。）

グレ・シュール・ロワンから幾度もベルニー夫人が彼に来るように言ってきたが、バルザックは仕事が多忙でなかなかいけないでいた。それで、少しの暇を6月に見つけると、その地に赴くが、この滞在中に彼はある小説を執筆しようと計画していた。ところが、バルザックは同じ6月に父を失う不幸を体験する。ベルナル・フランソワはかなりの高齢になり、健康にもあまりすぐれなくなっていたが、ある日、馬車の事故で重傷を負ってしまい、明日をもし

れない危篤状態に陥った。それで、バルザックはその知らせを聞き、直ちに仕事を中断し父親を見舞いにかけてつけた。6月19日、ベルナル・フランソワは数十年來の彼の友人でもあったナカール博士の病院で不帰の人となったが、それでも息子オノレがフランス文壇に花々しく登場しつつある姿を辛じて眺めることができたのである。享年83歳だった。

実は2、3年前にバルザック夫妻はスキャンダルに追われてヴィルパリジを去り、ベルサーユに住んでいたが、隣人には娘夫婦やドメール家のひとびとがいたので、バルザックの父は家族や知人にみとられて生涯を終えたのである。

そのスキャンダルとは、アンドレ・ビリーによると、『絶対的貧困のなかで騙され捨てられた若い娘たちによるスキャンダル』の著者である高齢のバルザック老が村の娘をはらませたことが原因であるという。

ところで、ゴンクールの1874年2月の日記にこのバルザックの父の一件が読める。それには80歳の老人と田舎女とのあいだで子供ができるのだろうかとある。さらにアンドレ・ビリーは信憑性がうすいと断りながらもアルセーヌ・ウセーというひとが1883年8月20日の『フィガロ』紙に執筆した次の如き記事を紹介している。

後年、ハンスカ夫人と結婚してパリに帰ったバルザックはボージョン病院の部長であるアノンセ氏の訪問を受けたという。アノンセ氏が言うには、バルザックの妹と自称していた女が死んだばかりです。本当に妹さんですか、勿論、作家はそのときはこの種の血族関係を否定したことであろう。しかし、時がすぎ、自分に死期が近づいていると悟った彼はアノンセ氏を呼んでこう言ったという。

「アノンセさん、私は悔悛する気になってあなたをお呼びしました。私は死を怖れていますので、良心に従って身辺をきちんとしてたい。あなたを前にして先ず始めに恥をかきましょう。あなたは正しかったのです。あれは私の妹です。ジャン・バプチスト・ルソーは彼女の父親を認めませんでした。それで、

私も私の妹とは認めませんでした。認めれば、それは私たち、ルソーにも私にも不幸をもたらすことになったでしょう。」

これは余談になるが、この親にしてこの子ありというべきか、われわれはバルザックにも私生児のあったことを知っている。不幸にも息子オノレより長命であった母や妹ロールがひそかに世間に知られることなく処置したらしいが。小説家バルザックの子供と認知すればどちらも不幸になると親父殿の先例に習ったのであろうか。

さて話を1829年に戻すと、バルザックはグレで仕事を続けるかたわら、必要にせまられてか幾度もパリへ出て来ている。彼の目的はふたつあった。そのひとつはすでに習慣ともなった王立図書館から歴史書を借用すること、いまひとつはその頃に入りが可能になった幾つかのサロンとの関係を維持するためであった。サント・ブーヴのドロルムではないが、バルザックはサロンに席があるということは文壇に席があるのと同じであることを知ったと思われる。それで、われわれがバルザックのあとを追ってゆくと、次にあげるサロンで彼の陽気な笑い声が聞かれたはずである。フォルテュネ・アムラン夫人、ブランセス・バグラシオン、メルラン伯爵夫人、ジェラルド男爵、シャルル・ノディエなどのサロンである。これらのサロンで、バルザックがスタンダール、メリメ、ヴィクトール・クーザン、キュヴィエ、ドラクロワ、パスタ夫人などと会っていたと推測されるけれども、パスタ夫人がスタンダールの恋人であるという噂が囁かれているのを耳にしたことであらう。

さらにバルザックは7月10日には、ヴィクトル・ユゴーに招待されていたから、ユゴーのサロンに姿を見せたことであらう。彼がユゴー家の「金の百合賞の部屋」に入ったとき、すでにヴィニー、デュマ、ミュッセ、メリメ、サント・ブーヴなどの面々が集まっていたはずだ。その晩、ユゴーはテロール男爵の要望にこたえて『マリヨン・ド・ロルム』を朗読することになっていたのである。

また、バルザックは2、3年前から知っていたダブランテス公爵夫人が彼を

レカミエ夫人のサロンへ紹介してくれたことから、そのサロンでシャトーブリアンと面識を持ち、ふたりのあいだであるマリニイのことが話題になったであろう。バルザックは彼との対話ができるのを喜んだ、彼にとってシャトーブリアンはまだまだ雲の上のひとであった。

さらにバルザックはヴィクトル・ユゴーも姿を見せていたソフィー夫人のサロンにも出入りするようになるが、そこで、翌年にはアカデミーに迎えられるラマルチーヌに紹介される。そのサロンでも他のサロンと同じく文学や政治が話題になっていた。政治になにかが起りそうな雲行きであった。周知の如く、翌年、七月革命が起った時代であった。

そして、バルザックの机上には彼が生れた時期の内幕ものがあった。革命政府軍と王党派との戦記である『ふくろう党』がそれである。